

住民と行政が一緒にまちづくり

うま くに 美し国へ

「美し国づくり協会」会員による対談・鼎談シリーズ「美し国」へ。2回目は、サステイナブル・コミュニティ研究所所長の川村健一氏と県立広島大学大学院教授の百武ひろ子氏に語り合ってもらった。

「美し国づくり」対談・鼎談シリーズ

〈2〉

川村 健一氏



(かわむら・けんいち) 1973年京都大学工学部卒。同年フジタ工業(現フジタ)に勤務、土木設計コンサルタント部、技術開発部を経て、87年から技術アタッチメントとして米国駐在。91年フジタリサーチ部設立。95年から同社社長、09年本社エンジニアリング本部副部長を経て、02年フジタ退社。NPO法人サステイナブル・コミュニティ研究所所長。広島経済大学客員教授、米国TWINSON社取締役、他、非常勤取締役7社。ロボティクス、環境、マルチメディア、新素材と多岐の分野の研究開発にかかわる。NPO法人「美し国づくり協会」理事。

百武 ひろ子氏



(ひやくたけ・ひろこ) 1992年早稲田大学大学院理工学研究科修了後、同年野村総合研究所研究員、97年ハーバード大デザイン大学院都市デザインコース入学、02年東京工業大学大学院社会学研究科価値システム専攻。県立広島大学大学院経営管理研究科教授。主に社会人を対象に合意形成教育についての研究を進めてきたが、現在は学校教育における合意形成教育に重心を置いた研究も。さらに、地域課題の発見・解決を実践する主体として市民を中心とした多様なステークホルダーによる地域コミュニティの育成を促進する公共空間の在り方を感性的価値に着目して研究。NPO法人「美し国づくり協会」理事。

司会 広島で「美し国づくり」であるには「美し地域」として何が浮かびますか。

広島から直接世界へ

川村 「美し」という中には、まちの在り方も大事ですが、暮らし方をサポートするリソースがどれだけあるか、かつさまざまな人が集まれるかが大事です。広島には海と山と両方があり、農業、漁業、畜産、木材、ましてやお酒もある。つくるとそれを供する人と、それをベラスにした産業の流れがあります。いわゆる一つの日本の経済圏で「広島から直接世界へ」であることです。

また、震災復興。原爆からのリコンストラクションするプロセスの中で、さまざまな被害を受けた人がいることを受けながらまちづくりをする。そういうものを考えるキーワードに「美し」があります。



平和大通り (写真提供: 広島市広報課)

百武 ただ景観がきれいとか美しいというだけではなく、そこに「美し」と言いたくなるものが必要ではないかと思っています。「美し」の語源を調べると熟して甘くなったおじいと言っているので「美し」になつていたらいいですね。ですから成熟したいいものも入っているかな。そういう目で見ると広島には、そうしたところは結構たくさんあります。生産現場を見ながら食べられる場所、例えばレモ、畑、レモンがなっているところを見て、カキにレモンをかけて食べるとか、そういうせいたくもこれから求められる、もっとフォカスされてきた。島の良さが内外の人に知られていいのではないかと思ったりします。

また、震災復興のことですが、平和大通りは広島市の景観の核となっていると思います。皆が散歩して、世界中の人から木を寄付してもらって大通りができた。それが都市の軸となっている。それは自然の軸と違って、

分たちでいって来た、関わって育ててきたランドスケープだと思います。川村 広島の中でまちづくりの一番最初のキーワードは「祈る平和」だったのですね。震災を受けた人たちが、自らの被害状況を話し合ったわけですね。世が変わって、「祈る平和」になり、「1000歩道場」もその一つです。その流れは今も続いています。

百武 そうですね。私は環境とばかり思い込んでいたので、すごくギャップというか、多様性があった、いろいろな軸の中で何をサステイナブルなものにしていくかという自体も皆で考えていく必要がある、要素があるのだ、もしかしたら人間関係とか信頼性とか、文化とか、それを持ち寄って話し合うことが、本当の意味でサステイナブルにしたかったのか関係してくると思います。

百武 戦災復興の時、都市全体としての軸をどうするか、1000歩道場もいろいろな都市で構想されたのですが、実現したのは広島と札幌、名古屋だけです。「創る平和」として、平和は皆でつくっていくものでしたら、価値観が多様化している人たちがどのように平和をつかっていくかという合意形成に役に立つのではないかと、というのが広島に来た大きな理由です。

川村 日本人の発想というのは、最初に100%のいいものができなくちゃいけないんです。私がアメリカで経験した宇宙衛星事業などでは、ミッションを出すときに100%なんてあり得ないんです。6割くらい出すのがエンジニアリングで、未完成だけど失敗を採りながらそれをリワークすることで成長させていくという発想です。

川村 1999年にアパスト会議があって「21世紀はどのような時代」になるだろうかとこのことを考える中で、サステイナブルな社会をつくらなければならぬというところを伝え始めたんです。技術は突然パッとテラブルの上で生まれて、それで幸せになるものではなく、その技術をその村なり、まちの暮らしの中に溶け込ませて使いついで、知恵としてその町の中に出てくるもの。だから、21世紀は地域の時代になるし、地域の中でどういうような知識を自分たちの流れに溶け込ませて、文化として生かしていくものだ。とこのことにおいて社会技術はとても大事になってくる。

感性的価値を話し合う

百武 私は景観計画などに最初に取り組んだことで、大学院を出て野村総研に入ったときも、景観条例の作成に参加したりしました。その時に、この景観が良い景観だとか悪い景観だというのは「誰が決めるのか」というのが私の中心になって

電柱が嫌いとか、「じゃ、じゃ、じゃしているのは駄目とか言われるが、本当に住んでいる人は、どういふ風景を望んでいるのか。実はこのプロセスがすごく大事なのではないかと、ということから「合意形成」という世界に入ったのです。そこに住んでいる人が大事にしたい、守りたい、このようにつくってきたいという景観は、はたから見るとはな

そこに住んでいる人、専門家の考えるとはちよと違つてもいいか、という感じが、良い悪いではなく、好き嫌いやという感情の中に感性的な価値を話し合えることが、どうやってあるのかわからないか、というのには、大きなテーマになっているのです。自分が建築を学んでいる時はパールの終わりやうだったのですが、海外からいろいろな人が来て、すごい奇みきて白が、変な斬新なデザイン、それを面白がっているのか、建築というのは、1年、2年で変わる広告みたいなものではないのに、それでいいのかとどうもはすく疑問に思っていて、どのように社会がそういうデザインを生み出しているのか、セネコンに入ったり、有名建築家のアトリエ事務所に入ったりするのが普通の仕事ですが、野村総研に入ると考えようと思ったのです。

百武 今回のプロセスに昔から興味があった、今でもそこに興味があるのです。こういうものを表現したいというのは、そこに住んでいる人が感じていることで、それに建築の専門家として応えるのが建築家のクリエイティブリティーだと思っています。

百武 私には海外から人が来たときに、このまちの人ほどなんな人たちのだろう、実際に話してみたいと思うところがあると思います。そのときにコミュニティセンターに行ったら一緒に「飯を食べられるとか、じかに地域の人と会える観光名所となるような施設ができたらいいな」と思っています。

公共施設を育てる

百武 今回のプロセスに昔から興味があった、今でもそこに興味があるのです。こういうものを表現したいというのは、そこに住んでいる人が感じていることで、それに建築の専門家として応えるのが建築家のクリエイティブリティーだと思っています。

百武 今回のプロセスに昔から興味があった、今でもそこに興味があるのです。こういうものを表現したいというのは、そこに住んでいる人が感じていることで、それに建築の専門家として応えるのが建築家のクリエイティブリティーだと思っています。

百武 今回のプロセスに昔から興味があった、今でもそこに興味があるのです。こういうものを表現したいというのは、そこに住んでいる人が感じていることで、それに建築の専門家として応えるのが建築家のクリエイティブリティーだと思っています。

百武 今回のプロセスに昔から興味があった、今でもそこに興味があるのです。こういうものを表現したいというのは、そこに住んでいる人が感じていることで、それに建築の専門家として応えるのが建築家のクリエイティブリティーだと思っています。

百武 今回のプロセスに昔から興味があった、今でもそこに興味があるのです。こういうものを表現したいというのは、そこに住んでいる人が感じていることで、それに建築の専門家として応えるのが建築家のクリエイティブリティーだと思っています。

百武 今回のプロセスに昔から興味があった、今でもそこに興味があるのです。こういうものを表現したいというのは、そこに住んでいる人が感じていることで、それに建築の専門家として応えるのが建築家のクリエイティブリティーだと思っています。